



てんのうじ知りたいウォーク第12弾

「ハイテク寺院と悠久の四天王寺・五智光院」

日時 平成29年4月16日(日) 13時15分受付開始 13時30分催行
主催 てんのうじ知りたい倶楽部(旧未来わがまち会議)
協力 天王寺区役所

◎**齢延寺**：曹洞宗(本尊:釈迦牟尼佛)

開創は元和9(1623)年。志摩国鳥羽の領主稲垣信濃守重種公が父母の菩提のため真田山に創立、寛永9(1632)年現在の地に移転、元の本堂・庫裏は戦災を免れましたが、阪神・淡路大地震で傷み、新しく再建されました。本堂の柱22本の下に100年間有効の免震装置が設置され、たたみの床がボタン一つで椅子席に変わるバリヤフリーの本堂になりました。彼岸桜の大樹あり、墓地には幕末大阪の三名医 原老柳、近世大阪の学問所「懐徳堂」や「梅花社」と並び称せられた「泊園書院」の創始者、藤澤東咳とその一族、洋画家の鍋井克之、新々刀期屈指の名刀工左行秀などの墓があります。平成20(2008)年4月に鐘門が完成しました。



◎**孤峰山龍池院 光明寺**：浄土宗(本尊:阿弥陀仏)

團公上人慶長8年2月(1603)旧南区三休橋に相蓮社傳譽上人欣求團公大和尚により開山
移転建立宝永4年(1707)

團公上人は慶長年間、大本山鎌倉光明寺で修行されて鎌倉より西に
行脚され、まずは播磨の光明寺を建立し3年ほど逗留し、帰り道にて
摂津の光明寺を三休橋に建立された。

豊臣秀吉が亡くなり、秀頼の時代になり元和元年(1615)大坂夏の陣で大坂城は落城、それから程なくして城下町であった大坂は商人の町になっていった。寺町ができたのはその後の江戸の中期の頃。時の東山天皇が元号を宝永に変えた、宝永4年に富士山が噴火を起こしてきたおむすび型の山は宝永山と名付けられている。また10月4日にはマグニチュード8.4の宝永地震が起こった。当時、南の攻めに弱いとされた大坂城。市内の各所にあったお寺を南側に並べ要塞とした、大坂城から見て一番外れに集められたのが、この下寺町(西寺町)東に生玉寺町(浄土宗)夕陽丘(曹洞宗)谷町九丁目から北に中寺町(日蓮宗)上本町六丁目から北に城南寺町(浄土宗)小橋寺町(浄土宗)等が集められた。光明寺はこの時、宝永四年(1707)旧南区三休橋にあった当山を下寺町に移した。



光明寺の本堂や各所には18世紀後半、町人たちをスポンサーとし、大坂で一派をなした大坂狩野一派の絵が多く飾られている。その中の中心人物であった絵師、大岡春トや吉村周山も絵の多くを描いた。時は流れ戦争の時は空襲で焼け出された人々は、お寺に避難した。すぐ近くに焼夷弾が2発落とされたが、被災した人々がみんなで消し止めた。この時たまたますぐ南側の寺院が大正期の出火で鉄筋に建て替えていた事もあり、地上からの火も隣まで来たが奇跡的に止まった。下寺町のほとんどの寺院が戦火

を浴び、焼け残ったのは光明寺から北の5ヶ寺だけであった。戦後は避難した被災民が立ち上げられるまで、お寺で様々な援助を行ったという。

平成に入ってから山門、本堂、庫裏は有形文化財に登録されている

○光明寺 著名人墓

大岡春卜

延宝8年(1680)～宝暦13年(1763)江戸時代中期の画家、はじめ独学で狩野派を学び、のち法眼となる。当時流行した絵本類の挿絵画家として大坂で活躍、鳥羽絵、彩色刷りの画譜を創始。

画巧潜覧はじめ多くの画譜を制作して、文人画の発達に寄与した。画本手鑑、和漢名画苑、芥子園画伝(中国画)鳥羽絵扇の的、明朝紫硯(精巧な色摺り画版画を用いる)

木村兼葭堂も5～6歳ごろ画法を学ぶ。伊藤若冲は初期に春卜の絵本から学び、春卜の弟子だったと言われる、多くの門人を育て大岡派の祖となった。妙心寺霊雲院「若松に鶴図」妙心寺衡梅院、高野山清浄院「山水図」などに襖絵を描いている

河野恕齋

寛保3年(1743)～安永8年2月9日(1779年3月26日)江戸時代中期の儒学者・漢詩人岡白駒の長男として生まれる。岡氏は旧姓が河野であったので、恕齋を旧姓に復させた。早熟で4、5歳で読み書きを覚え、10歳で詩文を作り神童と称された。儒者として備前蓮池藩の大阪藩邸監となる。

大坂では混沌詩社に参加、また詩を好み活躍したが37歳で没した。易書に「周易王注補正」がある

中井市郎右衛門・中井利安

宝暦元年(1751)～寛政5年(1793)心学者、大坂静安舎を建て教育に努め42歳没

大坂心学の開祖。本姓安藤、名利安、号酔亭、9歳で中井の養子となる。石田梅岩の学を手嶋堵庵に学ぶ。天明8年(1788)京師大火で学舎は罹災し、浪華人の勧めで大坂に移住し雑魚場に学舎、のち舎生が増え寛政2年(1790)新学舎を建てる

吉村周山 1700～1773

江戸中期の画家、姓吉村氏、通称は周次郎。号は周山、寛延から安永頃に活躍し大岡春卜と並び評された。安永6年(1777)刊「難波丸綱目」には大岡春卜派と周山派が二大流派と、当時の儒者や書画家と交流があり多数の門人を擁し、山水・人物を得意とされ寛延3年(1750)刊の「和漢名筆画英」明和4年(1767)刊の「和漢名筆画宝」が知られている。根付師としても著名で作品は彩色するのが特徴だった、贋作も多く出回ったが、どれも周山の力量には及ばなかった。根付は余技で中年になり制作を止めてしまい、息子の周圭も見た事がないと述べている。

大岡春卜と吉村周山は近世大坂画壇中、活躍した「狩野派」の代表格とされている。宝暦を含めた30数年の間江戸・京都に先駆けて狩野派の粉本を出版公開、以後何度も版を重ねた。絵本史上特記される絵師である。

大岡春川

享保4年9月(1719)安永2年(1773)55歳没 江戸中期の画家、大岡春卜に学び養子となる。明和元年法橋になり仙洞御所造営の際には障壁画を画いた。著作に「絵本福寿草」「蒔絵大全」など

田中家墓所

田中橘泉 医師小児科 田中杏亭を教える

田中杏亭(きょうてい)・享保2年(1717)天明元年(1780)63歳没 江戸中期の医師。大坂で叔父の田中友安に小児科を学び、養子となる。友安の遺児を育て家を継がせ、自身は別に開業する。

田中橘齋 医師 田中五郎作 田中二松 田中有年

◎一雲山化川院 善龍寺：浄土宗（本尊：阿弥陀仏）慶長7年7月（1602）順誉宗林大徳開山

当時は行基菩薩作の阿弥陀如来座像を御本尊としてお祀りする。聖徳太子所造の阿弥陀如来像、聖徳太子所造の十一面千手大悲観音立像、権作各形の十三仏、智證大師作の不動明王像、圓光大師直作の影像、圓光大師直筆の六字（南無阿弥陀仏）の御名号、唐絵の十三図等安置されていた

元和5年頃、大坂城主となった徳川家康の外孫松平忠明は、大阪市街の再建と再開発を行ない市中に散在していた寺院を集中立地させ寺町を形成させた、寺町は町の整備と軍事的意味合いをもっていた。その折当寺も今の難波付近より現代の下寺町に移転して来た。江戸より昭和までの各時代を通じ、浄土宗の摂津に於ける名刹寺院として重要な役割を担って来た。

明治初年、千手観世音菩薩が難波神社より招来され、観音堂を建立、大坂三十三所観音巡りの第三十二番札所となる。

戦災・昭和20年3月14日山門を残し堂宇、伽藍を始め幾多の宝物、寺物が全焼消失した。山門、四天王像四体、一部の軸、香炉、仏器等のみが戦災を免れた。再建・焼け跡から27年後の昭和47年5月5日中興第21世得誉佑眞和尚により、御本尊が迎えられ境内、本堂、庫裏等が再建された。

◎山門(登録有形文化財)

江戸1810年建立江戸／1810／1926～1945移築木造、瓦葺、間口2.7m、左右袖塀付1棟



◎石碑

- ・大坂三十三所之内第三十二番札所千手観世音
- ・圓光大師御霊場茶毘灰中出現之尊像
- ・海中出現地蔵

尊下寺町一帯が大坂湾の海底だった頃、一人の漁師が光り輝くお地蔵さんを発見し、家に持って帰った。母親は病で、このお地蔵さんを拝み続ければ治るかもしれないと毎日拝んだ。すると母親の病がたちまち治りそれ以来「口縄坂の身代わり地蔵」として振興されている



◎枝垂れ桜

江戸時代より善龍寺の枝垂れ桜（糸桜）の名所として賑わい、今も見事なさまは魅了している

◎善龍寺 著名人墓

小柴景山

没享和元年7月17日(1801)狩野派の画家なり名は守典。探春斎守直の子なり、家風を学んで善く畫がけり法眼の位を与えられ幽探斎と号す。江戸中期の画家。父小柴探春斎は一心寺に眠る

◎梅旧禅院：曹洞宗（本尊：観世音菩薩）寛永9年8月創建 戦災昭和20年3月14日

芭蕉堂及び芭蕉墓がある。芭蕉が南御堂近くの花屋仁左衛門宅で亡くなった時、当時の梅旧院のご住職がお経を読んだと、芭蕉と梅旧院との関わりを記した花屋日記にあり。芭蕉と天王寺とは縁が深く、亡くなるまでの一ヶ月ほどの在阪中、天王寺に遊んだ事が有り供養碑が多く残っている。

不二庵二柳（ふじあんじりゅう）俳人

円成院に志太野が芭蕉の墓碑や句碑を建てたとき、寺に寄進したした像で粗末に扱われている事を知った不二庵が怒り、梅旧禅院に芭蕉堂を建て、像を安置したと伝わる。芭蕉の墓碑と二柳の墓碑が並んで立つ。



橋本稻彦

天明元年(1781)文化6年(1809)29歳没 江戸中期の国学者、伊勢松阪の本居宣長に入門、大坂では頼山陽と厚く交わり、鈴谷門の巨擘と称される。宣長学の忠実な後継者として「紫文製錦」「万葉梯」「紫文消息」「訂正新選姓氏録」等を著す。

安藤秋里

詩人篠崎小竹に従学し門下の四天王と称された、詩文と書を善くした儒者

齋部道足 (いんべーみちたり)

宝暦8年(1758)文化3年8月(1816) 江戸中期・後期の国学者。長歌にすぐれ八百余首を残した。著作に「神国御稜威(しんこくみいず)など

小石李伯

代々若狭小浜藩の家老職、林野(はやの)一之進は脱藩し、小石李伯と改名し諸国流。浪中に生まれたのが小石元俊、現在も続く医学の小石家。

齋藤方策

明和8年(1771)嘉永2年(1849)79歳没 江戸後期の蘭学医。小石元俊に、江戸で大槻玄沢に学び大坂で開業。文政5年コレラ流行のとき診断。治療法を考案した、のち萩藩医。中天遊と共訳の「把而翁湮(パルヘイン)解剖図譜」がある。

◎藤原家隆塚：別紙

◎四天王寺：和宗 総本山(本尊:救世観音菩薩)

四天王寺は、推古天皇元(593)年の創建です。今から1,400年以上も前のことです。『日本書紀』の伝えるところでは、物部守屋と蘇我馬子の合戦の折り、崇仏派の蘇我氏についての聖徳太子が形勢の不利を打開するために、自ら四天王像を彫り「もし、この戦いに勝たせていただけるなら、四天王を安置する寺院を建立しましょう」と誓願され、勝利の後その誓いを果たすために、建立されました。

聖徳太子が四天王寺を建てられるにあたって、「四箇院の制」ととられたことが『四天王寺縁起』に示されています。「四箇院」とは「帰依渴仰 断悪修善 速証无上 大菩提所」つまり仏法修行の道場である“敬田院”、病者に薬を施す“施薬院”、病気の者を収容し、病気を癒す“療病院”、身寄りのない者や年老いた者を収容する“悲田院”の四つの施仏教の根本精神の実践の場として、四天王寺を建てられたといえるでしょう。これらの施設は、中心伽藍の北に建てられたようです。(文・写真：四天王寺ホームページより)



◎五智光院(四天王寺)

大日如来を本尊とする五智如来を安置し、授戒灌頂会を修する道場で、灌頂堂ともいわれます。また、徳川家代々の位牌を納めており、御霊舎(みたまや)ともいわれました。

五智如来とは、密教で五智を五仏に配すことをいいます。五智とは、法界の自性を明確にする智、鏡の如く法界の万象を顕現する智、諸法の平等を具現する智、諸法を正当に追求する智、自他の作すべきことを成就せしめる智、の意味です。

(文・写真：四天王寺ホームページより)

